

第 34 回 設楽ダム魚類検討会 議事概要

日 時：平成 28 年 11 月 14 日（月） 14:00～17:20

1. 設楽ダム魚類検討会検討経緯

- ・ これまでの魚類検討会の経緯とその成果、保全検討の流れについて説明を行った。

2. 飼育繁殖

- ・ 水槽飼育では、繁殖期の水温管理、水槽の大型化などの環境改善を行い 3 ペアで、それぞれ約 40 個体、10 個体、30 個体の合計約 80 個体の支川集団の稚魚を得たことについて報告した。平成 28 年の繁殖において、孵化後の生残率が過年度と比べ低かったことについて考察し、改善を検討することとした。
- ・ 屋外試験池では、3 池で、それぞれ約 150 個体、260 個体、140 個体の合計約 550 個体の稚魚を得ることができたことを報告した。過年度の屋外試験池での繁殖成功事例を基に繁殖場となる石組の間隙、出入口の大きさや向き、仔稚魚の餌生物の流れ込みを考慮した配置を工夫したことなどにより、毎年繁殖個体を得ることが可能となり、屋外飼育での繁殖技術や、系統保存の知見が蓄積できた。来年度からは、移植対象集団での野外実験に新たに着手することを報告した。
- ・ ネコギギの人工授精の予備試験として行っているギギを用いた試験については、過年度に成功した事例を基に、採卵と授精のタイミングを検証し、孵化に成功したことから、技術的に可能であることを報告した。このことから、ギギでの人工授精試験を一旦休止し、今後は、これまでの試験で得られた知見を基に、個体群の保存・存続のため、増殖個体による人工授精のネコギギへの適用条件、実施の判断について検討を行っていくこととした。
- ・ 新たに整備した八橋環境保全試験池において、平成 28 年増殖個体から飼育を開始する。また、底生動物等による餌場を加えた飼育実験を行うことを提案し、評価軸を整理した上で実験に着手することについて了解を得た。

3. モニタリング調査結果

- ・ 流域のモニタリング淵では、確認個体数は減少傾向となっており、一部支川のモニタリング淵では、平成 28 年は極めて少ない確認個体数となっていることを報告した。
- ・ 平成 28 年は、前年に比べ、大幅な個体数の増加は見られなかったが、複数の淵で当歳魚の確認ができる状況であった。繁殖期の 7～8 月にかけての出水が少なかったことから、仔稚魚の流失や繁殖期における水温低下がおきなかったことが影響要因のひとつとして考えられることを報告した。

4. 放流実験

- ・ 過年度より実験を行っている実験箇所 A では、平成 25 年に 37 個体を放流し、遺伝的多様性の確保のため平成 27 年に 25 個体を追加放流した。いずれの放流個体もわずかながら 2 出水期を越えて生存を確認し、繁殖期に成熟した雌個体も確認されたことから、保全対策工は生息場所として機能していることを報告した。放流個体の成長の評価については、野外個体との比較を行うなど、次回詳細に分析し報告することとした。
- ・ 平成 27 年より実験を行っている実験箇所 B では、平成 27 年の秋調査で放流個体が確認されなかったが、平成 28 年の調査では淵外で 1 個体が確認された、個体は移動をしながら生存している事例があることを報告した。
- ・ 平成 28 年の新規実験箇所 C では、春の放流後 20 日程度後には放流個体が確認されなかったが、出水後の秋調査において 60～70m 上流の淵で個体が確認された。このことから淵の連続性や個体の移動を加味したモニタリングについて検討し、実施していく方針について了解を得た。

- 平成 28 年の移植対象集団の屋外試験池での増殖実績を踏まえ、今後の移植候補箇所となっている支川等で、さらに優先順位を考慮、検討した上で、新たに野外実験を行っていく方針について了解を得た。詳細な実験計画は次回報告することとした。

5. 繁殖場実験

- 繁殖利用された自然間隙と、繁殖に成功した屋外試験池の石組みの間隙を基に作成した人工構造物（繁殖場ユニット）による繁殖場の技術開発を行い、現地試験を実施したことを報告した。
- 実験箇所Dにおいて、ネコギギが繁殖場ユニットを昼間に隠れ場として利用していることを確認した。自然間隙が複数ある中で、環境改善により新たに創出した間隙の利用が確認され将来的に繁殖に利用される可能性がある。今後は、より選好的に利用され、間隙を維持できる配置や繁殖に利用しやすい構造等を考慮し実験を継続することを報告した。
- 実験箇所Eでは、繁殖場ユニットの利用は確認できていないが、淵内で当歳魚を確認したことを報告した。

6. その他の魚類に関する検討

- トウカイナガレホトケドジョウについては、過年度に作成した生息ポテンシャルマップの分布傾向確認のため、有識者のヒアリングを実施した。今後、補足の現地調査や他流域での分布調査結果等により、生息ポテンシャルマップの分布傾向の検証を行っていく方針について報告した。

7. 設楽ダム事業の工事の状況について

- 工事用進入路の施工にあたり、ネコギギが生息する淵に近い部分の基礎工事の工法変更を行ったことを報告した。水際から離れ、振動騒音等の影響も小さくなると思われるが、施工にあたって、引き続き、振動等の影響を小さくするため、繁殖期を避けて施工することを再度確認した。

8. 今後の調査・検討予定

- 今後の調査、検討予定について報告した。

9. その他

- 継続して実施している流域のモニタリング淵で個体数が減少している現状や、今後の移植対象集団の移植の不確実性に備え、保全措置の一連の行為として、移植対象集団及びその下流集団を含めた流域でのネコギギ保全について検討を進めていくこととした。

以上